

シグネチャーパビリオン名称

「いのちのあかし」

宇宙にも広がる心の視野を持つこと
人間だけの世界ではないということ
地球の秩序を取り戻すこと

ああ、この星に暮らす
みんなの中にもいた、わたし
わたしの中にもいた、あなた

世界って素晴らしいな
その一部であるって、尊いな

それは「あかし」として記憶されるから

それが大切な誰か：ではなくとも
見知らぬ誰か：であったとしても
むしろ
まったく知らない国の
まったく会ったことのない人であったとして
そこに「いのち」が等しく存在するから
国境や人種や宗教や文化や風習の違いを超えて
一気にこの地球を自分の星であると
お互いが同時に気づく時
健やかで晴々しい気持ちになるのは、



河瀬直美

「いのちのあかし」パビリオンは、現代アートとのコラボレーション。

わたしたちのいのちのあかし。人間社会に本質的な問いを投げかけるパビリオンとして、現代アートチーム目[mé]との「対話」による新しいパビリオンを創造します。



対話は可能か？

この問いに、映画監督 河瀬直美さんと真っ向から挑戦します。

果たしてわたしたちは、存在を分かち合うことができるのか。

この世界を形成する人類に向けて、
本当の対話を目の前に起こし、その瞬間を目撃したい。

2025年日本国際博覧会の中で、
奇跡を起こすパビリオンを目指します。

現代アートチーム目[mé]



パビリオンコンセプト

《わたしのなかのあなた、あなたのなかのわたしに出会う場所》

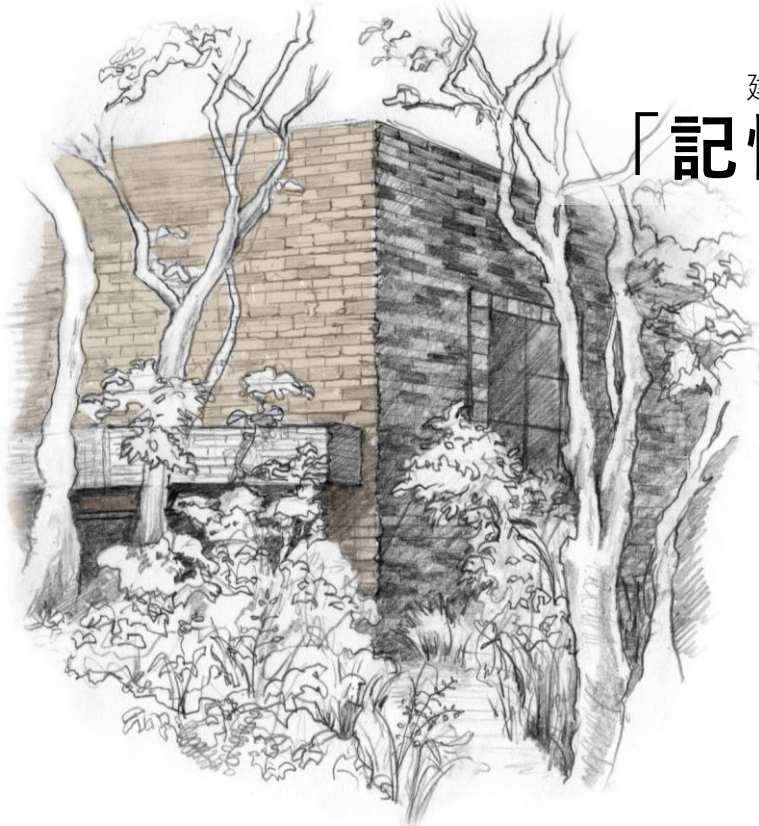
パビリオンエリアテーマ

森の中の映画館

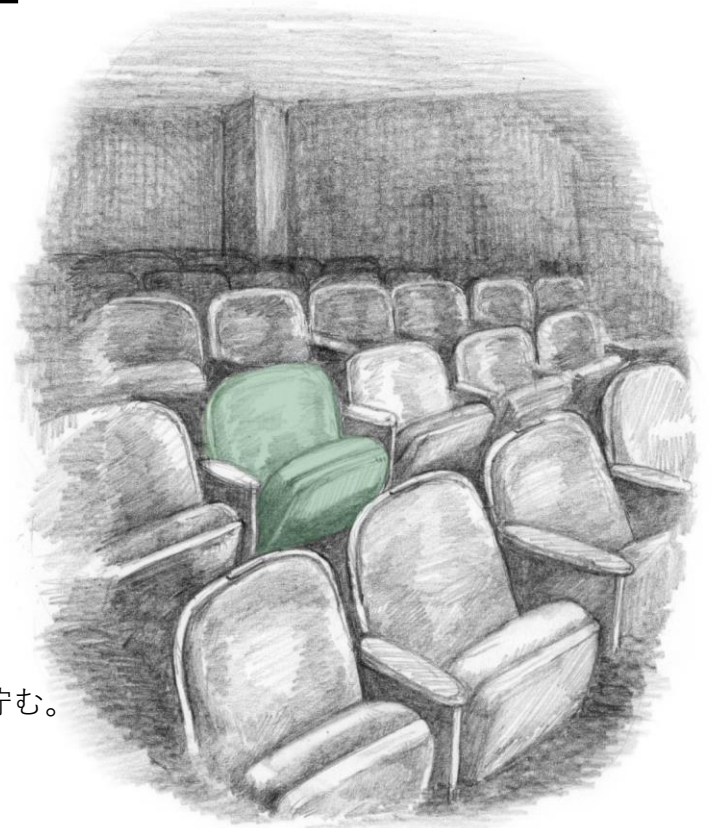
多様な生命が循環する森の中に、
自己と他者と深く向き合う空間が現れます。

建築コンセプト

「記憶の建築」

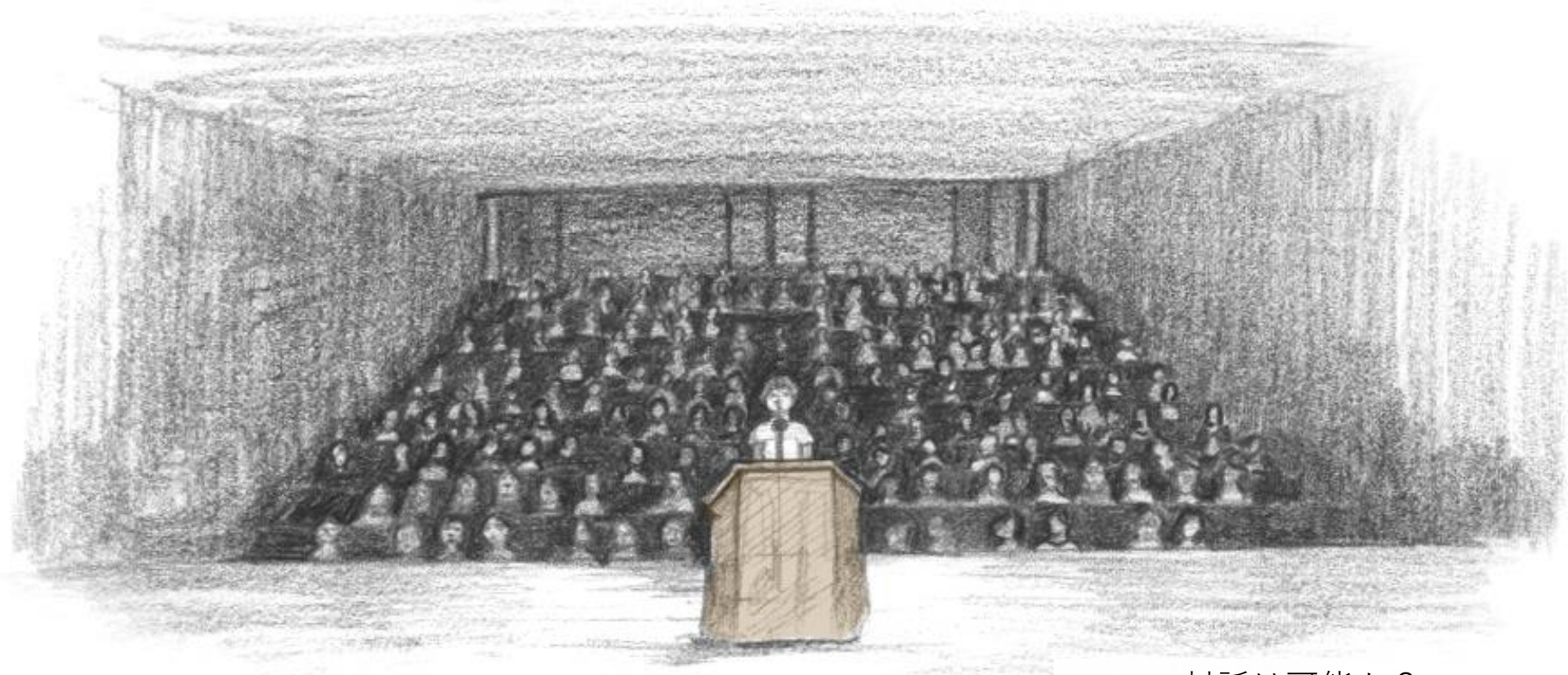


木々を抜けると昔からそこにあったような建築が現れる。
森には、確固とした建築でありながら、どこか幻のように存在する映画館が佇む。
記憶と現実のあわいのような建築は、「いのちのあかし」という大切に
不確かな存在と呼応するように、人々を対話の空間へと誘ってゆく。



パビリオン展示

「対話シアター」

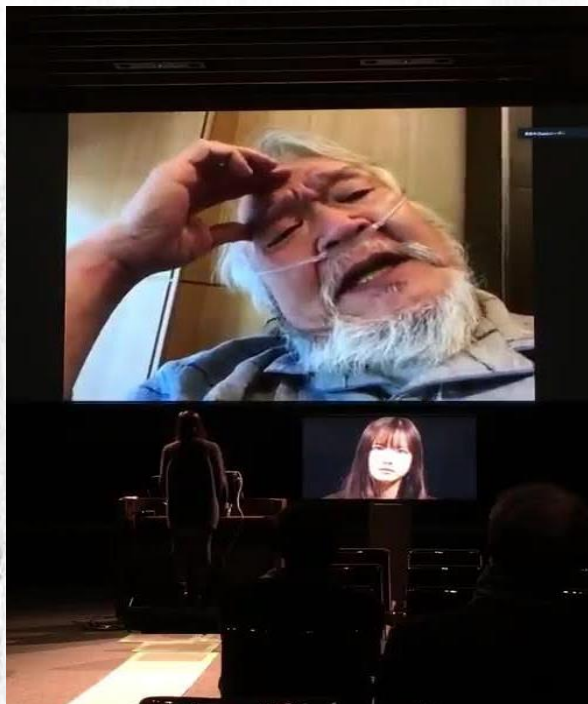


対話は可能か？
人類の今と未来に向けた挑戦

パビリオンのシアター空間。スクリーン越しに初めて出会う2人。
相手のことを知らない状態で「対話」が始まる。



リアルタイムに繰り広げられる、ドキュメンタリー。
映画でも演劇でもインスタレーションでもない「対話」空間。
観客は、編集不可能な創造の瞬間に対峙する。



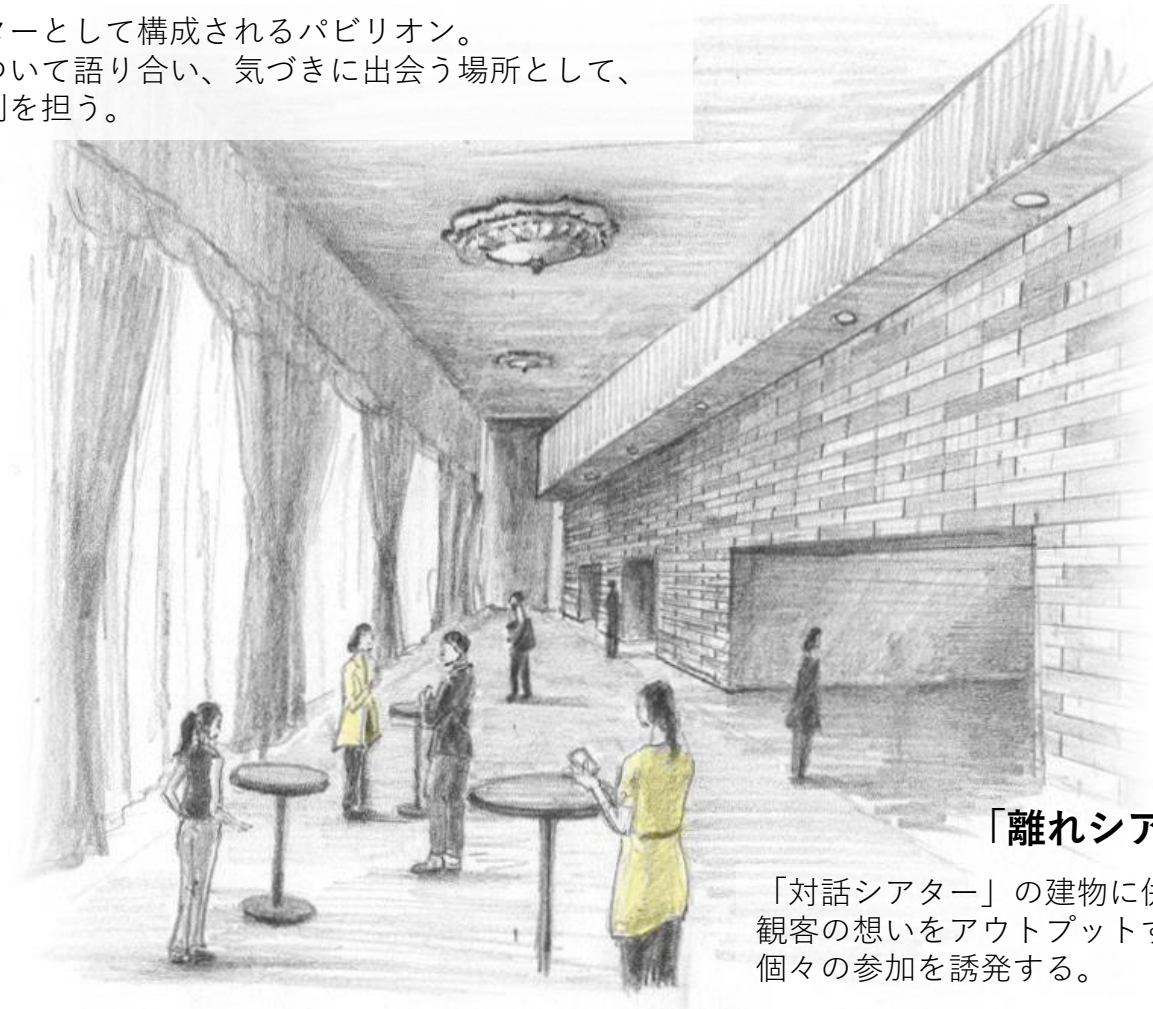
初対面の二人の会話が空間に広がる。

一瞬一瞬のリアリティを
観客をはじめ、話者やスタッフも
固唾を呑みながら同時に体験。
本当の「対話」の瞬間を
共に目撃する。



ホワイエの機能

全体がひとつのシアターとして構成されるパビリオン。
「対話シアター」について語り合い、気づきに出会う場所として、
ホワイエは重要な役割を担う。



「離れシアター」

「対話シアター」の建物に併設される小さなシアター。
観客の想いをアウトプットするなど、パビリオンへの
個々の参加を誘発する。

河瀬直美キュレーション
森をテーマにした
森の映画祭&こども映画ワークショップ

※「静けさの森」を利用想定



映画制作WS：夏休みのなら国際映画祭の企画とコラボ。

「森」や「いのち」、「対話」をテーマに奈良の森でユースたちが撮影を行い、
万博で上映会&トークセッション。

シグネチャーイベント

「森の映画祭／こどもワークショップ」

クリエイターチーム

アートディレクター

目[mé] 荒神明香・南川憲二・増井宏文



PHOTO: GOTO TAKEHIRO

計画統括ディレクター

森ビル株式会社 **杉山 央**

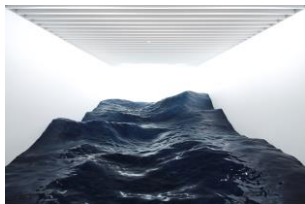


展示・バーチャルコンテンツプランナー

ソニーマーケティング株式会社 **佐藤 哲也**



目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021,
Tokyo Tokyo FESTIVAL
スペシャル13
撮影：津島岳央



展示風景：「六本木クロッシング
2019展：つないでみる」森美
術館（東京）2019年
撮影：木與恵三
画像提供：森美術館（東京）



「MORI Building DIGITAL ART
MUSEUM：EPSON teamLab
Borderless」 ©teamLab



©MADIA AMBITION TOKYO



「ひびきにふれる、NIFREL
（ニフレル）」



「2020年ドバイ国際博覧会日本館」